

眠りながら 飛ぶ

藤井颯太郎

自分

も知らない

自分が存在するっ

てのが怖いよなシンプル。

人間が生まれてから死ぬまでの間、大体二十年以上は寝てるらしいんだけど、普通に成人一人人生成

できちゃうくらい寝ちゃってるのウケるし怖い。要するに少なくとも自分の人生の

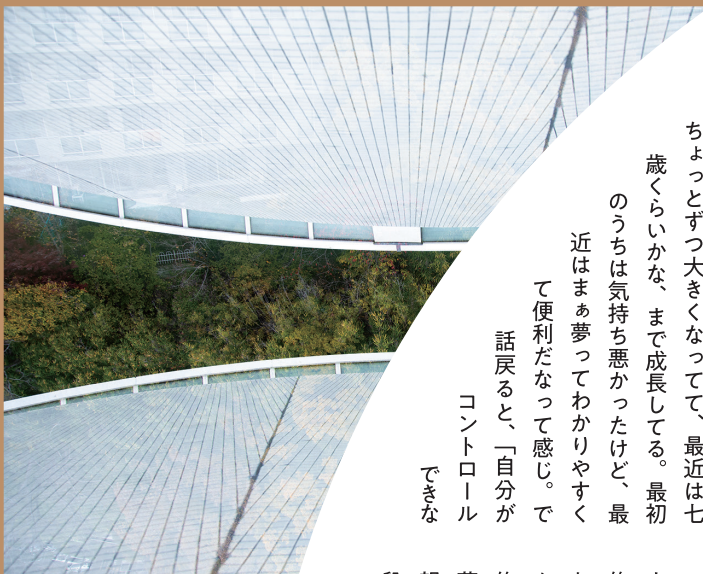
四分の一はコントロールすることができないということらしくて、この科学的事実に残り四分の三ですらうまくコントロールできない俺は心底絶望する。今年二十八になる俺は、そのうち七歳くらいは「俺の知らない俺」として過ごしたわけだ。俺の場合さらに、ナルコレプシーって言うんですけど、浅いすね眠りが。子供の頃から四六時中、異常なくらい眠くて、バイト中レジ打ってても寝るし、上司に怒られてる途中でもお構いなしだし、彼女と飯食って笑ってても次の瞬間トブわけ。自分で言うのもなんだけど、誰も悪くないっていうか、予告とかないの。一気にマジ、シームレスな感じで夢なんか入っちゃうから、現実と夢の境目に気づけなくって。高校ん時とか授業中に武装したテロリスト入ってきて、撃たれたと思ったら即、白着たお医者さ

んとかが入ってきて手術始めるの、麻酔なしで。ありえないくらい痛いんだけどまっ毛一本動かさなくて、死ぬほど苦しい。目覚めたら汗だく。で、流石に子供ん頃からそういうのが続いてると「夢を見極めるコツ」みたいなのが掴めるようになってきて。とにかく、ありえないことが起きている時はやばい。イルカとかが教室入ってきた時は八割がた夢だし、教科書開いても文字はあるのになんて書いてあるか読めなかったら九割がた夢だし、あー俺の脳みそが処理落ちしてんなーみたいな時は大体夢。なんだけどもあ、最近割と、もっと簡単に夢だってわかる特徴があつて。いつからか思い出せないけど、夢の中に毎回、おなじ子供が出てくるようになった。大体そいつは窓とか、水槽とか、ガラスとか、なんでもいいんだけどガラスの向こうからこっちを覗いてくる。怖いのは、その子供はたぶんちよつとずつ大きくなって、最初は七

歳くらいかな、まで成長してる。最初のうちは気持ち悪かったけど、最近

はまあ夢ってわかりやすくて便利だなんて感じ。で話戻ると、「自分が

コントロール
できな



い自分がいる」って怖いよねってことが言いたかったわけで、だから、寝るときはなるべく一人で寝るようにしてて、家族とか恋人とかでも絶対に無理なんだよね。寝てる間の自分が怖いから。とはいえ、そうも言ってるらんない時もあるにはあつて、こないだ飛行機乗った時はそうも言ってるんなかった代表例なんだけど。こういう、他人の前で寝なきゃいけない時は一応、眠剤のむようにしてて、いつもは割と素直に寝ちゃうんだけどその日は全然寝付けなくて、なんかイライラしてきて。左隣のおっさんはちっせえ画面でニューシネマパラダイス見てて、マジ世界はえらく小さくなったもんだなって感じだし、右っ側のやつは小学生くらいのガキのくせに近くに親がいないくて、挙句オレンジジュース溢しちゃったらしくて慌て出して、マジ勘弁してくれよって思いながら、機内食のお手拭き渡そうとしたとき。そのガキ側の窓の外に信じられないものがみえた。カモメ。雲の上飛んでる飛行機の横を、何羽かカモメが並んで飛んでんのよ。最初あれ？くらいの違和感だったんだけど、いや、ただことじゃないなって思った頃にはもう遅くて、振り返ると反対側の窓の外はもう夜になって、機内の全員が眠ってんのよ。絶対おかしい、また知らんまに寝ちゃったわと思つたし、絶対おかしいんだけどタイミング悪いことに絶対トイレ我慢できなかったから、夢中でトイレ行くのはマジリスキーすぎるとは思いつつ、でも絶対気持ちスッキリしたくて、覚悟してトイレ行って、したわ。眠剤飲んじやったから、しばらく目覚められないかもなあと思って、覚悟決めた。トイレ出たらドアの前でCAさんたち爆睡してて、人の夢なかで爆睡すんな

よなとか思ってたなら、また別のCAさんに話しかけてる子供がいて、興味本位で近づいてみたら、隣の席に座ってたガキだった。なんか溢したオレンジジュースのおかわりを貰いに来たらしい。よく見るとそいつ、毎晩夢の中に出てきた「ガラスの向こうのあの子」だった。爆睡してるCAさんに、起きたらオレンジください……と控えめに囁いていた。可哀想だったから、その子の濡れた座席拭いてやってたら、隣のおっさんの映画に興味があったのか、小さな画面を斜めからじっと見入っていた。何百人も乗っているはずのこの飛行機の中で、俺とその子だけが起きていた。「あの鳥ってね、眠りながら飛んでるんですよ」やることなく窓の外のカモメを見てたら、その子が話しかけてきた。カモメは脳みそ半分眠らせて休んで、その間にもう半分で羽ばたかせて海を渡っていくらしい。この子が言ってることを鵜呑みにするなら、いま俺は寝てて夢見てるけど、もう半分の脳みそでは夢の中にいることを自覚してて、これはもはや理論的にはカモメと同じ土俵に立っていて、つまり俺も眠りながら飛んでるんじゃないかって思ったのよね。で、それを言ってみたところ「お腹が空いた」って言うんで、俺の分の機内食あげたら、半分だけ食べて、残りは俺に返してくれた。昔、夢に出てくる人間は全員自分だって話を聞いたことがあるんだけど、じゃあ「眠りながら飛んでる鳥がいる」なんていう、俺が知らないことを知ってるこいつは何者なんだろう？なんで毎晩夢に出て来んの？聞きたいことは結構あったけど、とりあえず、親は？とだけ聞いてみたら、寝てるって言いながら、座席下の普段あんま開けないところを開けて、ライフジャケット取り出して、

着はじめた。俺は子供を襲ってか、コン



ト
ロールでき
ない親がめちゃくちゃ嫌いなんだけど、無性に腹立ってきて、夢に対してそんなムキにならなくて良かったんだけど、そのライフジャケットとかさ、そういうやつで遊ぶの結構アレだぞ！ってキツめに叱ったら、やっと目が合つて、遊びじゃないからっていうわけ。ここので降りるからって。その子がさ、窓開けたんだよね。飛行機の。開けた途端、機内にあったいろんなものが一気に外に放り出された。雑誌とか機内食とか隣のおっさんのニューシネマパラダイスとか巻き上げて、吹っ飛んでって、最終的にはその子も窓に吸い込まれて外へ出ていった。目の前で人が飛行機の外に弾き出されたのなんて初めて見たから、うまく呼吸できなくて、覚悟して窓ガラス覗いたら、男の子はカモメにまたがってガラス越しに手を振ってきた。カモメがゆつくり降下してく、というか落下していくと、俺たちの機体も前のめりに傾き始めて、カモメと一緒に落下してって、聞いたことのない音を立てながら揺れ始めた。雲抜けても落下は止まらなくて、海面に叩きつけられる直前、

目が覚めた。目が覚めると、そこは夜だった。周りの乗客全員が眠っていた。廊下に座っているCAさんがつまんなさそうな顔で携帯いじりながらまだ起きてたんで、あ、現実だと思つた。隣のおっさんは寝たまま映画を放置してて、勝手に自動再生されたスタンドバイミーが虚しく上映されてた。寝る前と明らかに状況が違ったのは、俺がそのおっさんのイヤホンの片耳を借りてて、なんか一緒に映画見てたこと。目の前には食べかけの機内食まである。俺が起きたのに気づいたCAさんは、立ち上がった。紙コップにオレンジジュースを入れて持ってきた。さっき俺がオレンジジュースを注文したらしい。全く身に覚えがない。隣の子供が頼んだんだろうと思つたけど、右の席には誰もいなくて、荷物も、誰かがいた痕跡もなにもなかった。どこまで夢だったんだろ。窓の向こうを見ると、カモメがいた。時速九百キロで飛ぶ飛行機と並んで、カモメが悠然と眠りながら飛んでいて、カモメがゆつくり降下し雲の中へ消えていくのを見ながら、俺はオレンジジュースを一口含んだ。

